京からあすへ

一人ひとりが描く
色とりどりの未来

創刊号

2022
March
Vol. 1

京都大学男女共同参画推進センター

京からあすへ 創刊号

Vol.1

CONTENTS

02 巻頭座談会
新しい世界を見たい！
学問のよろこびはすべての人の手のなかに

10 **未来に贈るきらめくバトン**
研究者インタビュー
丸山里美（文学研究科）
竹之内沙弥香（医学研究科）
中筋 朋（人間・環境学研究科）
中神由香子（環境安全保健機構 健康科学センター）
木村里子
（大学院横断教育プログラム推進センター
プラットフォーム学卓越大学院）

25 **みちみちて一歩**
卒業生インタビュー
片岡直子
持田真歩
橘 菫
円尾芽衣
村上 宥

40 学生の街 京都 散策マップ
42 京大で学ぶ！　女子学生座談会
46 イベント／表彰制度

巻頭座談会

「自身の手で未来をつくっていこう」
という願いを込めた『京からあすへ』。
創刊の今号は、
世代と研究分野の異なる3名が集い、
学問をとおして新たな扉を開く楽しさや労苦を
率直に語りあいました。
理想を思い描き、望んだ未来を紡ぐ自由は
だれの手にもあるべきもの。
自由というバトンを手に、
京都大学で未来をかたちにしませんか

稲垣恭子センター長（写真中）
理事・副学長

徳山奈帆子助教（写真左）
霊長類研究所国際共同先端研究センター／
野生動物研究センター

榑谷夏香さん（写真右）
工学部建築学科 2 回生

新しい世界を見たい！

学問のよろこびはすべての人の手のなかに

榑谷●家が京都大学桂キャンパスに近くて、幼いころから家族とキャンパスを散歩するなどしていましたから、京大は身近な存在でした。自由を尊重し、多様性を受け入れる懐の広い大学だという理解でしたね。森見登美彦さんの京大を舞台にした小説『四畳半神話大系』や『夜は短し歩けよ乙女』でも、学生が自由奔放に学生生活を送る姿が描かれていて、「京大はこんな大学なんだ」というイメージはできていました。いまは、期待どおりの楽しい毎日を送っています。（笑）

稲垣●私が入学したときも、「自由の学風」のイメージは強かったですね。あれから45年もたっているから、実態は少しは変わっているかもしれませんが、「自由」という印象が何十年も変わらずにつづくのはすごいですね。

徳山●私は幼いころからの動物好きで、大学では霊長類研究とそのフィールドワークをしたかったんです。進学をまえに調べると、京大はこの二つの期待をかなえてくれる場。宮城県の高校だったので同級生は東北や関東の大学をめざすなか、私は京大一筋。（笑）

でも、入学するとさっそくカルチャーショック。動物の知識には自信があったつもりでしたが、「野生生物研究会」というサークルに入ったら、自分がいかに井の中の蛙だったのかを思い知らされました。

稲垣●「動物オタク」のような人は京大にはたくさんいますからね。

徳山●学名でしりとりができたり、学部のころから研究室に入り浸って論文を書いたりする方がたくさんいて、ほんとうに刺激的でした。

それに、私は女子高出身でしたから、理学部の受験会場の男性の多さには驚きました。入学すると、50人のクラスに女子学生は5人。これになじむのには時間がかかりましたね。

いながき・きょうこ
1956年、広島県に生まれる。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程退学。滋賀大学教育学部助教授、京都大学教育学部助教授、教授などをへて、2020年から現職。

左／学部３回生のときに、友人と飛騨高山に旅行した
右／修士課程在学時、学会の合間に公園で撮影

稲垣●女子学生の比較的多い教育学部でも、私の時代は50人中10人が女子学生。食堂に行けば男子学生ばかりだし、女子トイレは探してもなかなか見つからなかった。
榑谷●工学部では、建築学科は女子学生の割合が多い学科でした。私は京大でどんな経験ができるのだろうかと、楽しみのほうが強かったのですが、親は娘に「京大卒」の肩書がつくこと、いわゆる「高学歴女子」への偏見に少し不安があったようです。
徳山●私は、一人暮らしする不安はありましたが、合格できたことのほうがうれしくて、将来への期待が不安を上回っていました。
稲垣●私も大学近辺での下宿でした。最初のうちははりきって授業に出たんですが、だんだんと24時間を好きにつかえる自由さに気がついた。(笑)百万遍の古本屋で本を買っては夜中まで読み、朝方に寝て、昼過ぎから1日がはじまる。(笑)
榑谷●私はコロナ禍ではない大学生活をまだ知りません。新歓も経験していないのに、下級生を引っ張る立場になってしまいました。ギャップは感じますね。

それでも幸い、建築学科は手作業で学ぶ授業も多くて、オフラインでの授業もありました。自習や授業準備で製図室にみんな集まるので、ほかの学科に比べるとまだ、友人との交流が深められた。

研究人生、どう転ぶかわからない

榑谷●でも、じつは私、将来の職業のことを考えて建築学科を選んだのではないんです。むしろ、文系分野での就職も考えています。
稲垣●建築家の安藤忠雄さんと交流があるのですが、安藤さんはもともとボクサーだったんですよ。
榑谷●そうなのですか！　私もこれからどう転ぶかはわかりませんね。(笑)工学部は約95パーセントが大学院に進学するので私もそうするつもりですが、専門をどうするかは未定です。大学院での2年をかけて研究したい分野が見つかればなと思っています。
稲垣●私も、明確な意思があって研究者になったのではないんですよ。「あたりまえ」とされていることを違う角度から論及してひっくり返すという、京大ならではの思考方法。そういう授業の体験が楽しかった。それが「進学してみようか」という軽い気持ちにさせた。

進学後は、「私に研究なんかできるんだろうか」とずっと不安でした。そんなときにある先生に「学問に枠はない。自分がやっていることを学問にする。自分の生き方が研究者の生き方だ」と言われてハッとして、それで気が楽になった。覚悟を決めたのではなく、気楽になったことで研究の道が拓いた。(笑)
徳山●私は、幼いころから研究者に憧れていました。修士1回生でアフリカのコンゴ民主共和国にはじめて行き、大型類人猿のボノボを観察したのですが、一つめずらしい事例に出会って、それが運よく小さな論文になった。これがうれしくて、研究者という道への思いを強くしました。

博士課程ではさらに成果が求められて悩むこともありましたが、小さな成果が出るたびに、「まだやれる」となったり、うじうじと悩んだり……。いまもそのくり返しです。

私の研究、ここが魅力

稲垣●みなさんはいま、どんなことに取り組んでおられますか。
榑谷●高校の勉強には「答え」があるけれど、大学の勉強には答えがありません。この違いを楽しんでいます。「設計演習」の授業では、建築の図面を書き、模型をつくって、そのコンセプトを教授にプレゼンします。答えはないのですが、作品には優劣がつく。なにが判断基準かわからないなかで、模索しながら手を動かすしかない授業は、やはり衝撃でした。
徳山●ボノボの社会行動、とくにメスの社会関係を研究しています。霊長類の多くはオスが優位の社会をもちますが、ボノボの集団はメス優位。体はオスのほうが大きいのですが、メスどうしが連帯してオスの攻撃に対抗する協力・親和関係を築くのです。
稲垣●なぜメス優位の社会になったのかはわかっているのですか。
徳山●食べものが少ない場所だとメスどうしも競合しますが、ボノボは比較的食べものの豊かな森に棲んでいて、メスどうしの競合が低いのです。メスどうしの融和的行動も発達しています。そうすることでよい関係が保たれているのです。

メスの相互協力によってオスからのハラスメントによるストレスを受けにくくなり、子どもがオスに殺されることもなくなります。そ

うすると、メスは安心して子育てできるようになります。メスが強いことは、ボノボ社会のさまざまな側面に影響しているんです。

稲垣●生物学的な性に組み込まれたものではなく、環境との関係のなかで社会がつくられてきた。

徳山●もちろん遺伝的な部分もあります。それに性的受容性の高さも要因だといわれています。交尾できる期間が短く限られるとメスをめぐってオスどうしが激しく争うのですが、メスが性的受容を高めるとオスどうしの競合は減る。

稲垣●権力に抗する社会が、メスを中心におのずと生まれているのですね。人間社会よりもうまくできているかもしれない。（笑）

徳山●ボノボのメスから学ぶことは、たくさんあります！

稲垣●榑谷さんはいかがですか。

榑谷●いまは、建築史と、空間と音や光、熱との関係を考える環境系の分野に関心があります。映画を観るのが好きなので、映画館の音響効果や空間と光との関係を研究してみたいと思っています。

建築史の教室では、文化財の跡地、遺跡などで土を掘り、往時の建築、遺構を調査されています。現地の空気を吸いながら、その地の建築の手法などを学ぶのも楽しそうです。詳しい研究手法はまだ理解しきれないのですが、発掘された杭から建築方法を推察したり、素材も科学的な分析で特定できたりもするようです。

稲垣●昔の家屋やお寺には、現代では再現できない構法や工法もつかわれていたようですね。文明は進歩するものと思いがちですが、そうとも言いきれないこともある。（笑）

徳山●コンゴで調査用の家を建てたことがあるのですが、大工ではないふつうのおじさんたちが建ててくれました。「こことここに部屋」をという、私が書いたざっくりとした図を見て、森から木やツルをとってきて骨組みをつくり、葉で屋根を葺き、土で壁をつくってくれる。

日本には高度な建物がありますが、自分ではそういう家はつくれない。それは進歩なのか、それとも人の生きる力が下がったのか、どっちなんだろうと考えます。

みずからの世界を拡げる教養の力

稲垣●それぞれ分野は違いますが、3人に共通した視点や共感が見つかるのはうれしいですね。

私の専門は教育社会学です。専攻を決めた当時、高等教育を受けることで職業や収入がどう変わるのか、ひいては教育によって人生はどう変わるのかを、計量的に分析することが脚光を浴びていました。

現実的でおもしろいと思ういっぽうで、やや違和感を覚えたのは、教育で変わるのは職業や収入だけではないという当たり前のことでした。とくに、当時の女性にとっての学問には、職業や収入には還元できない次元の価値があるはずだと思っていたからです。

私たちが、「京大で自由の学風にふれたい」と感じたような、新しい世界に飛び込む飛翔感を与えてくれるという役割が、教育や学問には強くあると思ったのです。そうしたことから成長の意味について改めて考えてみたいと思い、女の子の成長物語などに関心をもつようになりました。

徳山●フィールドワークにも、知らない世界に飛び込むことで自分の世界が拡がる、成長するという楽しさがあります。私のフィールドのコンゴの調査地には水道やガスはなく、村人はいまも農耕と狩猟採集が中心の生活を送っています。

最初は、文化の違いにもとまどいました。たとえば、「ありがとう」を言わない文化なのです。村人たちは毎日のように、「傷を消毒してくれ」などとやってくるのですが、「ありがとう」もなく去ります。最初はそれがストレスでしたが、「ありがとう」の言葉がないと、なぜこれほどにストレスを感じるのかを自己分析するうちに、「そういう文化なんだ」と理解できるようになりました。（笑）

稲垣●他文化の人と深く接するとカルチャーショックはある。それでも他文化に出会いたい、新しい世界に挑戦したいという思いには、寛容性がそなわっていることが前提ですね。

私の研究の一つに、第二次世界大戦前の女学生の教養についての調査があります。戦前の男性中心の教養主義は、読書によるストック型が基礎になっていました。ところが、女学生の教養はストック型ではなく拡がってゆく社交型。当時の女性はお稽古ごとなどの「たしなみ」を学びました。でも、それは、枠にはめて制約するような「たしなみ」というよりも、「たしなみ」をとおして社交を拡げたり人間関係を滑らかにするなど、外に開く性格もあった。新しい世界への挑

戦として、むしろ自由だと感じたのだと思うのですよ。

女性は制約されていたものの、社会的な役割は期待されていないからこそ、自由に教養や技能・芸能の世界を膨らませて生きていた。このことを教養のもう一つの系譜として掘りおこしたいと、当時80歳を超える女学校の卒業生にお話をうかがうなどしました。楽しい経験でしたね。

徳山●女性の研究者だから、そのおばあさんも心を許して話をしてくれたということはありますか。

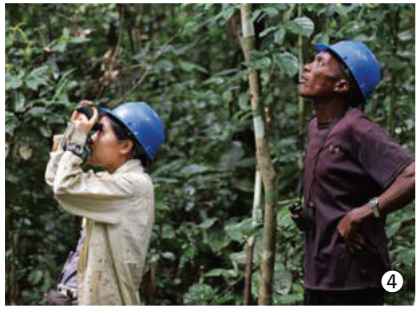
稲垣●それはすごく感じました。

徳山●同じものを見ても、調査する人によって視点は変わりますね。私は、ボノボのメスどうしの関係を見ながら、自分の女子校時代を思い出すのです。なにかすごく理解できるところがあったりする。（笑）バックグラウンドが多様な人が研究することも重要ですね。

語られてこなかった「フィールドワークと生理」

稲垣●理系でも文系でも、「ハードな分野には女性は進学しない」といわれたりしますが、「そうかな？」と思うのですよ。アフリカでのフィールドワークはハードでしょうが、この分野には女性が比較的多く挑戦しています。ハードといっても、乗り越えたくないハードさと、乗り越えてでも挑戦したいハードさがあるでしょうね。

徳山●2021年の秋にオンライン・トークイベント、「聞きたい！フィールドワークと生理のはなし」を開きました。国立科学博物館の木村由莉さんに「フィールドワークのときの生理って、つらいよね」とSNSで話したのがきっかけでした。「女だからって、あなどら



❶調査対象の野生ボノボたち　❷ボノボや森林の保全について地域住民と話しあう　❸近所のおじさんたちが調査用の家をつくってくれているところ　❹樹上のボノボを調査助手とともに観察中

とくやま・なほこ
1988年、東京に生まれ、宮城県で育つ。京都大学理学研究科博士後期課程単位取得退学。京都大学霊長類研究所研究員、日本学術振興会特別研究員SPDをへて、2020年から現職。

れたくない。がんばらなきゃ」という気持ちもあって、がまんしてしまうのです。繊細な話題ですから、参加者の顔が見えず、匿名でも参加できるオンライン・イベントはかえってよい手法でした。

稲垣●重要なのに、これまであまり語られなかった話題ですね。

徳山●開催前後のアンケートに、参加者の方たちがものすごい熱量のコメントを寄せてくれました。みんな悩んでいても、他人に相談できなかったことなんだな、と実感しました。

榑谷●フィールドの現場ではどうされているのですか。

徳山●症状が比較的軽いので、ほぼ対策なしにがんばることでやりすごしていました。それでも、1、2日は調査を休むことはありますね。

榑谷●調査地は、水洗状況も衛生環境もよくないでしょうね。

徳山●調査ではとにかく森の中を歩きますし、トイレもがまんしがち。湿度も高くて、衛生的にもよくない。

　数年前に、あるイベントで産婦人科の医師のお話を聞いたのですが、「フィールドワーカーがピルを飲まないなんて」と力説されました。実際に飲んでみるととても楽で、これまでの選択を後悔しました。ピルへの抵抗感をもつ人は多いのですが、こういう情報発信を通じて意識を変えたい。「大丈夫だ、がんばらなきゃ」と思わずに、若い人たちには力をもっと発揮できる道を選んでほしい。

榑谷●機会があれば、私もぜひお話を聞いてみたいですね。

徳山●そうですね、建築史で土を掘って調査するお話をされましたが、そのトークイベントの共催者の木村由莉さんは古生物学者です。化石を発掘するのは砂漠や山中などトイレのない環境も多くてたいへん、とおっしゃっていました。

稲垣●京都大学には女性研究者が少ないこともあって、自分が女性であることをあまり意識せずに、私も研究をつづけてきました。けれども、やはり日々の見えないストレスがあって、あんがいそうした細かなことがつまずきや悩みの理由になるものです。京大としても、各部局の手近な場所に授乳スペースや休憩室をつくるほか、遅い時間に会議は開かないなど、みなさんと相談しながら一つひとつ変えようとしています。

百人百様のロール・モデルを

稲垣●女性研究者が少なくても、ロール・モデルがいなくても、研究意欲があればやれると思う一方で、それぞれの領域で優れた仕事をしている女性がいると励みになるし、そういう人に出会うとうれしいですね。京大でもいま、在校生、教員、各界で活躍する卒業生の交流の場をつくりたいと、新しくネットワーク組織（ここのえ会）を立ち上げる予定です。

徳山●霊長類研究のパイオニアには、女性が多いです。チンパンジーはジェーン・グドールさん、ゴリラはダイアン・フォッシーさんがいて、私も幼いころからお二人の本を冒険物語のように読んでいました。そういう人がロール・モデルだったのだと思いますね。

　国際霊長類学会にはたくさんの女性の教授がいらっしゃるのですが、日本では少ない。学生時代は女性が多くても、立場が上がるにつれて減ってゆく。やはり気になりますね。

稲垣●京大はとくに、女性の教員比率が低いのです。「先生」ということばも、男性と結びついている感じがある。

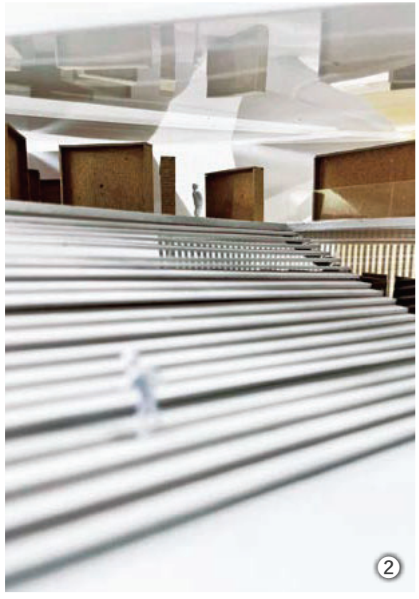
徳山●たしかに男性といっしょにフィールドワークに行くと、まず男性が「先生」とよばれます。

稲垣●近年、よくいわれるアンコンシャス・バイアス（無意識のバイアス）ですね。私もある大学で学生から、「女性の先生だと心配」と言われたことがありました。紹介した本はきちんと机に並べているまじめな学生でしたが、「大学の先生は男性だと思っていたから、女性に教えられるのは不安です」と……。

榑谷●ええッ！　驚きです。

　建築学科では、女性の教員は増えていると思います。学生がつくった作品をみんなで囲んで教授がアドバイスをする授業があるのですが、女性の先生が堂々とお話しされるのを見ると、「かっこいいな」と。ロール・モデルになっていると思います。

徳山●女性のロール・モデルというと、育児も仕事もがんばっている方のイメージですね。私はいまのところ結婚や育児の予定はないのですが、研究者も結婚して子どもを産まなくてはいけないのかなと、後ろめたさのようなものを感じることもある。



❶❷授業の図書館設計課題で制作した200分の1スケールの模型とその内観のアップ。提出締切が近づくと、製図室に泊まりこんで作業する学生も多い。　❸所属する映画サークルでの一枚。自主映画を制作している。役割は固定せず、大半のサークル員が脚本執筆から撮影、出演、編集までを担う

くれたに・なつか
2001年、京都市に生まれる。2020年、洛南高等学校を卒業し、京都大学工学部建築学科に入学。映画サークルに所属。

稲垣●研究もプライベートも、すべてをがんばる人というイメージがあるかもしれませんね。育児をする研究者にも、「こんなにがんばらなきゃいけないんだ」とハードルが高くなる面もありますね。

徳山●同じ状況の同僚ともよく話をします。だれかから言われたのではなく、私たちが勝手に感じているだけなのですが、「あの人は子育てをしながらがんばっているのに、私は……」という罪悪感。

稲垣●本音にはありますね。「家庭がないぶん研究の時間がとれるのに、このていどなの？」と自分に課してしまう。だけど、人間には遊びやゆとりも必要ですからね。（笑）

徳山●男性のロール・モデルにも、それこそ多様なバリエーションが必要ですね。「男性が家計を支えなければならない」という価値観、道徳観に悩む男性研究者の話も聞きます。

稲垣●「男性的であらねばならない」などの枠にはめられて苦しいという悩みも聞くようになりましたね。こうなると、男性も参加できるディスカッションの場をつくりたい。

「ダイバーシティ」と一言で言っても、女性の生き方にもダイバーシティはあるし、男性の生き方にもある。男女に依らない性自認の方もいて、それぞれの「n個」の生き方があります。

　さらに、世代やライフ・ステージが違えば、サポートの必要な箇所も違うでしょう。ぜひ、たくさんの声を聞かせてください。

開催日：2022年2月10日（木）
場所：京都大学吉田泉殿

interview
01

自分の目と足で。フィールドワークが私の研究の原点

丸山里美
文学研究科 准教授

まるやま・さとみ
京都大学文学部 卒業→京都大学大学院文学研究科 修士課程修了→同大学院 博士課程修了（日本学術振興会特別研究員 DC）→日本学術振興会特別研究員 PD →立命館大学産業社会学部 准教授→京都大学大学院文学研究科 准教授
［研究テーマ］女性の貧困

音楽をとおして興味をもった社会学

高校生のころは、軽音楽部でバンド活動に明け暮れていました。音楽がその時代の社会的状況や差別された人たちの声を反映して生まれることを知り、大学では社会や文化について考えることのできる社会学を専攻したいと考えるようになりました。目標を定めてからは、京都大学文学部の受験に向けて努力しました。

大学入学後は、軽音楽部での活動のほか、映画を見たり、講演会に行ったり、おもしろそうと思ったところにはどこにでも顔を出していました。夏休みなどの長期休暇にはバックパックを持って放浪の旅に出ることもありました。また1回生から参加していた現代風俗研究会[*1]という集まりで、さまざまな個性をもつ学生や研究者たちと知りあい、研究の楽しさにふれることになりました。

そうした環境のなかで、身近にいたのが社会学の大学院生や研究者だったことも、3回生で専攻を決めるさいに社会学を選ぶ理由となりました。なにかフィールドワークをして卒業論文を書きたいと考え、テーマを「ボランティア」に決めて、自分もボランティアをしながら参与観察をしました。大阪市西成区の釜ヶ崎地域で行なわれていた炊き出しをフィールドにし、3回生からは毎週のように通っていました。

交流と体験に導かれ研究者の道に

「調べてものを書く」仕事に就きたくて、学部生のころは新聞記者になりたいと考えていました。しかしフィールドワークや卒業論文を書く作業が楽しく、また実際にやってみると、短期間でアウトプットを求められる記者よりも、長期間調査に取り組める研究の方が自分に向いていると思い、学部3回生の冬に研究者をめざすことに決めました。現代風俗研究会をとおして知った、社会学の大学院生や研究者が身近にいたこともあり、研究者の生活のイメージがつきやすかったこともあったと思います。

卒業論文のためのフィールドワークをした釜ヶ崎は、日雇労働者やホームレスの人が集住している、男性が圧倒的に多い街です。そこでフィールドワークをするなかで、この街で女性が生きる困難を、身をもって知ることになりました。それをきっかけに、ときどき見かけることのあったホームレスの女性が、どのようにこの困難のなかを生きているのかを知りたいと思うようになりました。院生時代は、女性のホームレスの方を対象に実態調査をしていましたが、現在は世帯内の資

泊まり込みで調査をさせてもらった、公園で暮らすホームレスの女性のテント

高校生へのメッセージ

京都大学は、それまでの人生のなかでは想像もつかないような多様な人やものとの出会いにあふれていると思います。私は受験で苦労しましたが、京都大学はそれだけの価値のある場所でした。みなさんもぜひ京大で自分の世界を広げる出会いをしてください。

研究の世界では、苦手なことをカバーしようとするよりも、得意なことを伸ばすことで、より途は拓けていくように思います。研究者をめざそうとするのであれば、まわりに惑わされず、自分の好きなことを追究してください。

源配分に焦点をあてながら、ジェンダーに留意した貧困の概念や測定の仕方について研究しています。

限られた時間を工夫して子育てと研究を

私生活では子どももいるため、研究と家事・育児などの生活との両立に、日々頭をつかっています。そのなかで心がけているのは、ひとつひとつの仕事にかかる時間や締切、優先順位を考えて、仕事のスケジュールを立てるということ。仕事を種類でわけ、午前中はもっとも集中力のいる仕事、ミーティングは午後に入れるようにするなど、それぞれの仕事に適した時間に行なうことで、限りある時間を有効に使えるように工夫しています。

自分のためだけに使える時間は多くないものの、研究に関してはかんたんに理解した気持ちにならず、ほんとうにわかったと思えるまで、時間をかけて取り組むことをだいじにしています。近い将来、できればまた海外で研究もしたいし、博士論文以降の研究を本にまとめる作業もしたい。子どもの成長を楽しみながら、自分の時間もだいじにし、研究をつづけていきたいと思っています。

＊1 現代風俗研究会
桑原武夫京大名誉教授を中心に、1976年9月に発足。現代の風俗現象を、従来とは違った角度から調査・研究し、社会を新しくとらえ直すことを目的に活動。

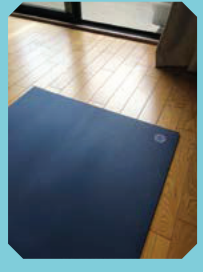
ESSENTIAL THINGS

子どもが通う保育園

子どもが大好きな友だちや先生とすごせる場所。私の生活にはなくてはならないものです。子どもが丈夫に育ってくれたことにも助けられました。

Key Item

ヨガマット



この上で毎朝1時間半のアシュタンガ・ヨガの練習をつづけています。時間を取られますが、健康維持にも役だち気持ちもすっきりし、長い目で見ると、生産性があがると思っています。

丸山先生のある1日

5:30	起床、ヨガの練習
7:30	朝食、子どもの世話、家事
9:00	仕事（研究、授業、会議、学生指導など）
17:30	夕食準備、子どものお迎え
22:00	就寝

interview
02

初心忘るべからず。叶えた夢をさらに大きく発展させるために

竹之内 沙弥香

医学研究科 准教授

たけのうち・さやか
京都大学医療技術短期大学部 卒業→Scripps Memorial Hospital La Jolla→San Diego Hospice and Palliative Care→San Diego State University School of Nursing BSN取得→京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 専門職学位課程 卒業 MPH取得→同大学院人間健康科学系専攻 臨床看護学講座 助手→同 助教→同大学院 医学専攻 博士号取得→同大医学部附属病院 倫理支援部 特定講師→同大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 先端基盤看護科学講座 看護倫理学分野 准教授
[研究テーマ]看護倫理、看護師による患者の意思決定支援

多くの人との出会いで実現した夢

高校では、個をたいせつにし、創造性豊かであることを重んじる「自主創造」の校風を、心底エンジョイしたように思います。すばらしい先生や友だちに恵まれ、担任の勧めでチャレンジした生徒会、3歳から習っていたスイミングの延長で入った水泳部の活動や文化祭など、勉強そっちのけで青春を謳歌しました。

あまりに高校生活をエンジョイしすぎて、大学受験に危機感を感じはじめたものの時すでに遅し。幼いころに流行ったアニメの主人公に憧れ、看護師になりたいと思いながらも家族の反対で文系コースに所属していた私は、1年浪人するなかで、やはり自分の夢である看護師への道をめざすことを決意し、理系に転向しました。

京大医療短大、アメリカ留学や大学院を合わせると、長く多彩な学生時代をすごしました。医療短大時代には、最終学年になっても就職活動をしていなかった私を心配して、担当の先生が面談し、ひそかに憧れていたアメリカのカリフォルニア州にあるホスピスへの留学を後押ししてくれました。その面談の帰り道に講義でそのホスピスを紹介してくれた先生にばったり出会ったこと、ゼミの指導教員であった恩師からも推奨を得たこと、両親が援助してくれたことで、留学の夢が現実になりました。

アメリカの大学では、日本で学んだ看護や医療の知識をもういちど英語で学び直し、カリフォルニア州の看護師免許取得まで、ひたすら努力の日々でした。でもそこから得た、たいせつな人たちとの出会いや、念願のホスピスで看護師として働いた経験は、すべて私の宝物です。

高校生へのメッセージ

大好きなこと、ワクワクすること、熱くなれることをたいせつにしてほしいと思います。うまくいかないときや落ち込むこともあると思いますが、あきらめないで。かならず周りの人や出来ごとがあなたを助けてくれて、ふとしたときに光が見えます。「答えはあなたの中にある」。

看護師の経験を活かして研究者に

アメリカのホスピス・緩和ケア病棟での仕事は、毎日新しい学びがあり、やりがいを強く感じていました。できるものなら、このままずっとここで働きたいと思うほどでした。しかし、母国のナースの緩和ケア教育や倫理教育に、なにか貢献できればと、5年間お世話になったサンディエゴの仲間やその家族に別れを告げて、京大の大学院に進学しました。

帰国後は、臨床で看護に専念したいという気持ちがなんども頭をよぎりましたが、大学院で取り組んだ研究プロジェクトをやり遂げるために、研究者をめざしました。当時、アルバイト先の病院で、担当していた患者さんが、私の研究テーマについて、「これからもっとたいせつになる領域だからがんばってほしい」と幾度も励ましの言葉をくださったことも、研究者になる大きな後押しとなりました。

現在私は、病とともに生きる人とそのご家族に、看護師がどのような意思決定支援をすれば、患者の価値観を反映した医療・ケアを提供することができるのか、患者が満足して日々の療養生活を送ることができるのか、よりよい支援方法を検討し、多くの研究者とともにモデル開発に取り組んでいます。また、日本文化に即した倫理的看護実践と看護倫理教育を進めるために、国際研究や国内共同研究などをとおして幅広い視点から考察を深めています。

役にたち、喜んでもらえる研究成果を

私生活では、看護研究者の立場から、妊娠・

出産・育児の経験をへて多くの発見をしました。身体の生理的変化の不思議や生命の力強さ、Nursing(看護、授乳、育児)のすばらしさを、実体験をとおして学べる貴重な機会は、女性ならではのメリットだと感じました。

これまでに、子どものケガや病気で、急に仕事の予定を変更しなければならないことがなんどもありましたが、それでも研究と生活を両立できたのは、どんなときもあたたかく支えてくれた上司のおかげと深く感謝しています。

大学時代からの付き合いの夫とは忙しいながらも、コミュニケーションをたいせつにして、家事・育児を分担しています。夫が私の価値観をよく理解してくれているから、仕事と子育ての双方をがんばれるのだと感じます。子どもの小さいころは、困難な課題に直面しては試行錯誤する日々でしたが、大学の支援や周囲の協力のおかげでここまでやってこられたことは、ほんとうにありがたいことです。

子どもが少し大きくなったいまは、成長をそばで見守りながらも、「初心忘るべからず」をモットーに、よりいっそう臨床研究に真摯に取り組んでいきたいと思っています。そして、質の高い看護ケアを実践できる看護師の育成や、患者さんのwell-beingの向上につながる研究を実施できる看護研究者の育成に力を尽くすと同時に、多くの医師や看護師の役にたち、患者さんやご家族に喜んでもらえるような研究成果を、一つでも多く発表したいです。

ESSENTIAL THINGS

ひととのつながり

家族は言うまでもありませんが、恩師の教えのおかげでいまがあります。写真は謝恩会にて、任 和子教授(医学研究科、左)、西森三保子さん(元附属病院師長、右)と。

Key Item

元気の源

研究室に飾っているゼミ生さんたちや家族の写真は、いつも元気をくれます。子どもたちがくれる小さな草花をときおり研究室に連れてきます。

竹之内先生のある1日

5:30	起床、お弁当作り
6:00	子どもに朝食を出したら出勤
	子どもたちの世話は、朝は夫、夕方は私が担当
7:00	職場に到着 講義・会議・ゼミ・研究
18:30	帰宅、子どもお迎え
19:00	夕食、家事、入浴
	家族にご飯をつくるのは楽しい！私のリラックス法かもしれません
21:00	翌日の準備、寝かしつけ
22:00-	残した仕事の整理、就寝

interview
03

たいせつなのは体感・体験の知。
自分のからだで実験し、自分自身をプロデュース

中筋 朋

人間・環境学研究科 准教授

なかすじ・とも
京都大学文学部 卒業→(フランス) リヨン第二大学学士課程修了→京都大学大学院文学研究科 修士課程修了→(フランス)パリ第三大学 修士課程修了→京都大学大学院文学研究科 博士課程修了→愛媛大学法文学部 講師→同 准教授→京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授
[研究テーマ]フランス演劇・身体と無意識

世界各国のパフォーマーとともに演劇三昧

高校時代は病気がちで運動禁止の時期があったため、体育祭や遠足などの思い出は少ないものの、ピアノに夢中になり一所懸命に練習したり、文化祭には友人とカジノを開いたり、小説を書いたり、好きなことに没頭する時間の長い毎日でした。当時はまだ自分の興味と勉強とが結びつかず、認知哲学を学びたいという漠然とした気持ちで、京都大学文学部へ入学しました。

入学後は学生劇団に入り、劇団の活動がはじまる18時になってその日はじめて大学に……ということも多々ある、不真面目な学生でした。劇団では、そもそも喋りながら動くということがとても難しく、自分が自分のからだをまったく把握していないことに気づき、その後コンテンポラリーダンスのワークショップに多く参加するようになります。

夏休みには、ギリシア、ドイツ、アメリカ、フランスなどさまざまな国の先生に1日中レッスンを受けたり、いっしょにパフォーマンスをつくったり、と贅沢な時間をすごすこともありました。第二外国語がドイツ語だったのにフランス文学研究室に進んだため、授業で読む文章にいつも手いっぱいでしたが、よき言語交換パートナーやその友人とすごすことで新しい言語を身につけていく楽しさを経験することができました。

哲学、科学……多角的方面から演劇にアプローチ

学部生のころは、自分がダンスや演劇の世界で体験していることと、大学での勉強とをかなり分けて考えていました。まったく違う研究をすることも考えましたが、最終的に、自分がからだ、意識、ことばについて体験したことを考えていくには、ことばを発しているからだと対峙する芸術である演劇について研究するのがいちばんよいように思えました。

また、19世紀末のヨーロッパは、からだと無意識の問題を考えるうえで、おもしろいターニングポイントです。もともとはフランス現代演劇を研究していましたが、その後、現代演劇をつくる大きな転換点となった19世紀末の研究へ。人間の脳の仕組みがわかってくると同時に、私たちが「無意識」の影響を強く受けているということも注目されるようになった19世紀末の、「人間の内面の表現はどのようなものになりうるのか、そしてそれを身体で表すとどのようなことになるのか」ということを研究のテーマにしています。このことを考えるには、演劇そのものだけでなく、当時の哲学・科学、そしてそれがどのように生活に働きかけていたかを知ることが必要です。

また、演劇作品や文学作品を見るにしても、その芸術的な価値を探るだけでなく、歴史資料として見る視線も重要になります。最近は、人間の思考が、魔術的なものと非魔術的なもののあいだでどのように螺旋を描いてきたかを考えるために、19世紀の小説や戯

高校生へのメッセージ

私自身は、自分が抱えているとても個人的に思えたこと、興味があって大学の外でやっていたこと、大学での研究としてやっていたこと、それぞれはどれも一見遠いものでありながら、最終的にひとつになってきて、研究者になりました。迷子になったようでも、そのあいだの足跡の意味をあとになって「発見」することがあります。迷ったときは、まずは迷っているあいだのことをよく観察するのもありです。研究者というのは「なって終わり」というより「なりつづける」ものという気もします。「あえて迷ってみること」におもしろさを感じるのなら、研究者であることは楽しめると思います。

曲、そして演技実践について考えています。

書くこと、話すことで芸術を表現する

演技というものをとおして気がついた「私は自分のからだの操縦が下手である」ということは、日常生活でもいろいろな「生きにくさ」を生んでいます。それに取り組むために、からだにアプローチして、その影響について考え、まわりの人たちともそれを共有していくうちに、大学院生になっていました。芸術を「している」人がまわりに多かったので、「それについて書く」ということには後ろめたさがありましたが、フランス留学でそのように「書く」、「話す」ということも芸術と同じ意味でひとつの行為になりうるということがわかり、これをずっとつづけていこうと思い、最終的に研究者になっていました。

研究者は、研究をしていくと同時に自分をプロデュースする必要もあります。そのことをたいへんだと思うより、自由でよいなと思う気質だったことが現実的には大きかったのだと思います。考えてみると、私は「自分のからだで実験すること」が好きなようです。語学でもからだを動かすことでも、頭でわかることと、それができるかどうかは別の問題です。なにかについて考えることや書くことは、この違いがわかりにくくなりがちですが、体感としてわかっているかどうかを置き去りにしないようにしています。

また、「ニュートラルに、けれども個性的に」ということも心がけています。身体がもっている「個性」と、日常生活の蓄積でできたからだに負担をかける「癖」は大きく異なります。一見個性にも見えるこの「癖」を解放したあとに出てくる「個性」をだいじにしたいと考えています。加えていままで学んできたことをさらに進め、学問として広げていくことができるといいですね。

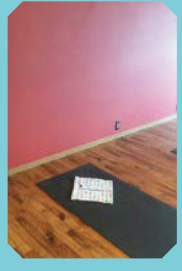
ESSENTIAL THINGS

書見台と万年筆、ノート

研究ノートなどを、いったんすべてデジタルにしたこともありましたが、数年まえにすべてアナログにしました。このスタイルが、もっとも考えが発酵しやすいなと思っています。

Key Item

アシュタンガ・ヨガ



かなり激しいこのヨガはもはや趣味ではなく、生命線のようなもの。朝、このブラックマットに立つ時間が生活と研究の基盤です。ヨガを通じて知り合った方々との結びつきも、大学院生のころからとても支えになっています。

中筋先生のある1日

5:30	起床
6:30	アシュタンガ・ヨガ(朝に練習するマイソールスタイルでの練習)
8:30-11:00	執筆・研究など
12:00	メール対応(お昼休みに一度メールを見るようにしています)
13:00	授業
16:30-18:00	授業準備、学生指導、委員会、メール対応など
19:30	夕食(朝食と昼食は予定が空いていればいただく感じなので、夕食の時間はゆっくりとります)
20:30-22:00	メール対応や事務仕事など

interview 04

臨床と研究を両輪に、病態の解明をめざして

中神 由香子

環境安全保健機構 健康科学センター 助教

なかがみ・ゆかこ

京都大学医学部医学科 卒業→同医学部附属病院 初期臨床研修医→同大学医学部附属病院、大阪赤十字病院、静岡てんかん・神経医療センター 精神科専門研修医→京都大学大学院医学研究科博士課程修了→日本学術振興会特別研究員（RPD）→京都大学環境安全保健機構健康科学センター 助教

[研究テーマ]統合失調症と自己抗体

悩んだ末に決めた医師への道

江戸時代に活躍した医師の一人で、門下生が3000人もいたとされる中神琴渓。私はその末裔(10代目)にあたります。そのため、父、祖父、曽祖父と代々医師であり、親戚にも医師が多かったことから、自然と医学の道に興味を抱くようになりました。でも、当時通っていた同志社高等学校から内部推薦で進学できる同志社大学には、医学部がありません。また、安易な気持ちで医師という職業を選択したくない思いがありました。将来どうしたいのかを真剣に悩んだ末、医学部受験を選びました。

京大医学部に合格しましたが、入学した当初は恥ずかしながら、医師＝臨床医と考えていました。「研究をする医者は変わり者なんじゃないか？」といった偏見すら抱いていました。ところが、6年間の医学部生活のなかで、熱い思いを抱き研究室に通っている同級生や先輩の存在が気になりはじめました。好奇心から研究室に通いはじめ、ドイツの研究室で実験する機会もありました。しかし、当時は動機が明確でないこともあり、あまり長続きしませんでした。でも、ふり返ってみると、この学生時代の研究経験があったからこそ、臨床医になったあとに基礎研究を行う選択肢が生まれたのでしょう。いまでは学生時代に研究に携わることができたありがたさと意義深さを強く感じています。

医学部を卒業し初期研修医として精神科臨床に携わるなかでやりがいを感じ、精神科を専門とすることにしました。そして、統合失調症と出会いました。統合失調症は幻覚や妄想が特徴的な精神疾患ですが、その病態には未解明な点が多く、いまも根治的治療方法は見つかっていません。長期入院を余儀なくされているたくさんの患者さんを目の当たりにし、なんとかよい治療方法を見出せないだろうか、と研究への思いが募るようになりました。

仮説から世界で初めての発見へ

統合失調症は思春期から20代の若い時期に発症します。生涯有病率は約1%であり、決して珍しい疾患ではありません。なぜ統合失調症になるのかについて研究が行われ、遺伝子異常や免疫異常などのさまざまな要因との関連が少しずつ明らかになってきましたが、解明されていないことばかりです。

一方、2007年に抗NMDA受容体抗体による脳炎が報告されました。この脳炎では統合失調症と似た症状が引き起こされますが、統合失調症とは異なり、免疫療法を含む根治的な治療方法が存在します。抗NMDA受容体抗体が発見される以前は、この脳炎患者さんの一部は統合失調症と診断されていた可能性があります。

私はこの事実を知り、「まだ見つかっていない未知の抗体によって統合失調症の症状が出現している一群があるのではないか」と思うようになりました。そして、「一部の統

高校生へのメッセージ

私自身は、統合失調症患者さんに出会い、治療の限界を目の当たりにするなかで、研究への熱い思いを抱くようになりました。いろいろな人と出会い、いろいろなことに挑戦するなかで、「やりたい」ことに出会えたら、その気持ちを大切にしてください。

また、学生時代の好奇心がその後の選択肢を広げてくれたので、「やりたい」が明確でなくても、ちょっと気になる、ちょっとやってみたい、と思うならば、ちょっと挑戦してみるという姿勢も大切にしてほしいと思います。人生は一回きりですので、後悔のないように、自分自身の内なる心の声を大切に過ごしてください。

合失調症患者の病態には自己抗体が関連しているのではないか」という仮説のもとに研究をはじめました。その結果、ミトコンドリア代謝に関連するPDHA1に対する抗体を有する一群が、統合失調症患者に存在することを発見し、世界で初めての報告を行うこととなりました。その後はさらにこの抗体の病的意義解明のため研究を深めています。

大きな夢をもって、細くとも、長く

私自身の研究が臨床に根差していることもあり、臨床業務も大切にしています。そのため、研究に割ける時間には限界があります。一方、研究にはこれだけやれば終わりという限界はなく、やればやっただけ、新たにやるべきことが出てくる側面があります。そのため、たとえ研究を進めるスピードが遅い状況になっても焦りすぎないように心がけ、細くとも長く、継続的に研究を進めていくことを信念としています。

家庭内のことを言いますと、私には娘がおります。夫が多忙であるため、家事や育児は私が主に担っています。仕事と家庭生活の両立には、福利厚生が役立っています。家事や育児を手伝ってもらえる環境が理想的だと思いますが、そうでなくても福利厚生を利用しながら仕事や研究を諦めない道もあると思います。

どのような状況であっても、いまできることを精いっぱいやるしかありません。私は統合失調症の治療をよりよいものにするという大きな夢をもち、細くとも長く、研究をつづけていきたいと思います。

ESSENTIAL THINGS

愛用のノートパソコン

2015年から使っているこのノートPCは、長時間通勤のパートナーです。そろそろ寿命かな、と心配していますが、長生きしてくれています。剥がれかけたシールにも愛着があり、このまま使用しています。

Key Item

iPhoneカバー

学位授与式の記念に娘と撮影した一枚を携帯カバーにしています。愛娘の写真を見ると、心があったまり、自然とパワーが出てきます。

中神先生のある1日

6:00	起床→朝食を作り子どもを起こす
7:30	子どもを保育園へ預け、京都大学へ（片道約1時間乗車する京阪電車でメールチェックや執筆作業）到着後、臨床や研究などに従事
18:30	保育園にお迎え
19:00	帰宅→夕食、家事（乾燥機付き洗濯機、食洗器、ルンバを活用）
21:00	お風呂
22:00	寝かしつけ

interview 05

自分の決断を信じ、決定木でたどり着いた先はイルカの研究者!

木村里子

大学院横断教育プログラム推進センター プラットフォーム学卓越大学院 特定准教授

きむら・さとこ
京都大学農学部 卒業→同大学院情報学研究科 修士課程修了→同博士課程修了(デンマーク・Fjord&Baelt研究センター留学を含む)→名古屋大学 日本学術振興会特別研究員(PD)→京都大学フィールド科学教育研究センター 特定研究員→同大学国際高等教育院附属データ科学イノベーション教育研究センター 特定講師→大学院横断教育プログラム推進センター 特定准教授(農学研究科 兼担)
[研究テーマ]海洋生物の生態を観測する手法の開発と生態解明

失敗つづきからの、運命の出会い

通っていた高校で出される膨大な課題をこなしつつ、友人と青春を謳歌していた当時、研究室で実験する研究者になる想像は少しはしていたものの、フィールドワーカーになるとは微塵も想像していませんでした。将来像はぼんやりしたままだったので、この時点で職業の選択をすることができず、選択肢の多そうな京大農学部への進学を決めました。

1回生のころは、浪人した反動もあり、徹底的に遊びました。まさか講義をする側にまわるとは思ってもいませんでしたが、このころの経験のおかげでサボりがちな学生の気持ちもよくわかります。（笑）2、3回生のころは家庭教師のバイトに明け暮れ、貯まったお金で海外旅行になんども行きました。3回生の学生実験で失敗がつづき、細かな作業が苦手だと気づいた私は、大きな生きものならば……！ と単純な理由で研究室を選び、4回生の研究室配属からは研究一色になりました。

学生の意思を尊重してくれる研究室だったので、「なんの研究をしたいですか？」と先生に聞かれたときに「海で大きい生きもの……クジラの研究がしたい！」と答えたところ、外部機関にいる水中音響でイルカの研究をしている先生となら、いっしょに研究が可能だと紹介されました。そして、その先生のスナメリの中国での調査に同行したことが、研究に夢中になるすべてのはじまりでした。

その後、大学院に進学したものの一般企業への就職の道も捨てきれず、修士1回生のときには就職活動もしました。しかし研究がとても楽しく、もう少しつづけたいと思い、「やれるところまでやろう！ いけるところまでいこう！」と決意し、博士後期課程への進学を決めました。

楽しいと思えるのなら大丈夫

最初から研究者をめざしてがんばっていたわけではなく、目の前にある二択の選択肢から選ぶことを続けていくうちに研究者にたどり着いた、と感じています。研究者はたいへんな職業だと思っていたので、このようなりゆきで研究者になることはためらわれましたが、尊敬する先生に「就職も研究もどちらも楽しい、楽しそうだと思うなら、君はどちらの道へ行っても大丈夫だよ」と言われ、やっと研究職に就く決心がついたのです。

いまは、水中の大型生物、おもにイルカなどの小型鯨類を対象とし、海洋生物を定量的に観察する手法の開発と生態解明に取り組んでいます。生物が発する音を利用した受動的音響観察手法、動物に直接機材を装着して行動データを得るバイオロギング手法などを駆使し、対象生物の発する音の特性や発声行動を調べたり、対象生物が「いつ、どこに、どのくらいいるのか」という基礎的な生態情報をあきらかにしたりしています。また、沿岸における船舶航行や洋上風力発電などの騒音が生物や環境に与える影響評価、飼育施設などにおける生物のストレス評価も行なっています。

その研究の過程で、生物（哺乳類）研究者

高校生へのメッセージ

研究はとても楽しいです。世界はまだ謎に満ちあふれていて、自分たちだけがふれられる不思議があるかもしれないと思うと、とてもワクワクします。

研究に限らず、なにごとも楽しむことがたいせつだと思うので、ぜひいろいろな経験を積んでみてください。きっと人生のどこかでなにかの役にたちます。悩むことも多いと思いますが、悔いのないように精一杯いまを楽しんでください。心と体の健康を第一に！

である自分自身が妊娠・出産したことは大きな経験でした。妊娠はたいへんでしたが、まるで繁殖生理学実習をしているかのようで、そのとき自分のお腹の中でなにが起こっているか、別の動物だったらどうなのか、調べたり考えたりすることがとても楽しかったです。

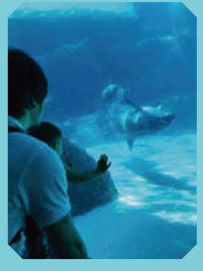
すべてにおいて一流をめざす 自分でありつづけたい

研究と生活(家事・育児など)の両立に関しては、私はできているとはまったく思っていません。家は散らかりっぱなし、研究活動も妊娠・出産していた数年分は遅れています。研究も生活もなにごとも妥協したくない性格なので、いろいろな外部のサービスをもっと利用できれば楽なのかも……と思うことも多いですが、子どもが幼いいまはなにごとも楽しむことを第一に心がけています。母、妻、研究者、すべてにおいて一流になりたいと日々願いながらも、まずはいまの自分の状況を受け入れて楽しめていると思います。

たいせつにしているのは、なにごとも自分で選ぶ、自分で決めるということです。私は、進路を決めるとき、就職するとき、結婚するとき、子どもをもつかどうか決めるとき、それなりに悩んで、選択肢のメリット・デメリットを考えながら、後悔のないようにつねに自分自身で決断してきました。結婚も出産もせず海外で研究をする選択肢、研究者にならず一般就職をする選択肢、もっとたくさん子どもを産む選択肢などもあったでしょう。それはそれで楽しそうと、いまなら思えますが、そのとき自分が決めたことに後悔はありません。どんな結果であっても自分で考えて決めたことならば、悔いなく楽しめると信じ、一日一日をたいせつに生活しています。

ESSENTIAL THINGS

週末は家族でおでかけ



水族館、動物園、科学館などによく行きます。子どもとも楽しく遊べ、私の勉強にもなり一石二鳥です。

Key Item

出産間近のスナメリ

以前に撮った写真で、単純に可愛いなと思ってSNSのアイコン等に使用していました。自分自身の妊娠、出産をへて、いまこの写真を眺めると、当時の彼女の気持ち・がんばりを想像し、鼓舞されるような気持ちになります。

木村先生のある1日

6:30	起床　夫出勤、子ども２人の朝食のみ準備し、身支度、子どもを起こす
8:15	子どもを保育園に預け、大学に
9:00	メールチェックなどをしながら自身の朝食。講義、会議、論文執筆、学生と打ち合わせなど。搾母乳を忘れずに(冷凍して保育園へ持参)
18:30	保育園にお迎え
19:00	子どもと夕食
20:00	夫帰宅・夕食、子供とお風呂
21:30	下の子就寝、家事(スマホでメールの返信、学生とSNSで打ち合わせなどをしながら)
22:30	上の子と就寝(夜間授乳0－１回)

卒業生インタビュー

みちみちて一歩

interview 01

ビジネスパーソンとして力をつけ、ビジネスを通して社会にインパクトを

片岡直子

アクセンチュア株式会社

かたおか・なおこ
理学部理学科 卒業
京都府 京都女子高等学校 出身

高校生のみなさんへ

いまだからこそ思うことかもしれませんが、高校生のときだからこそ思うこと、感じることがたくさんあって、それらはその後の人生においてとてもたいせつな宝物になると思っています。京大に入ろうと思うとどうしても受験勉強一辺倒になりがちかもしれませんが、高校生活でやりたい、楽しみたいと思うことがあるのなら、ぜひ、全力でそれを楽しんでください。

また、京大入試は難易度こそ高いかもしれませんが、その門戸はだれにでも公平に開かれていると思います。正しい努力をすれば、だれしもが京大に入るチャンスがあると私は信じているので、もし少しでも「京大に入りたい」という気持ちがあれば、「自分なんか無理だ」と思わず、一歩踏み出してほしいと思います。

受験勉強は気負わず、ふだんどおりに

高校の授業や塾に通いながらも、勉強だけではなく文化祭などの行事ごとや部活には本気で打ち込んでいました。京大をめざすにあたり、勉強にはそれなりの時間を割いていましたが、部活も行事も、あらゆることに本気で取り組んできたと思っています。

高校生のときに、大学などの進路について考えはじめましたが、自分は幼いころから動物が好きで、彼らがどう感じているのか、なにを考えているのか、ということに関心があると気づきました。そして個体以上のスケールのマクロの生物学を学びたい、との思いで、霊長類学をはじめとした、野生動物の行動や生態の研究ができる京大の理学部を志望しました。京大が難関大学だということは知っていましたが、目標としたあとも、それまでとは大きく変わらず、いま自分はなにをすべきなのか、ということをつねに考えながら着実に目標へ向けてすごしていました。

学生のときはニホンザルの研究をしていました

「自学自習」の理念で身についた主体性

京大には「自由の学風」があると言われていることもあり、「自由度がかなり高いのだろうな」と思っていましたが、実際に多くの意思決定を自分で行なう必要がありました。とくに入学当初の授業選択の時期などはいい意味で、迷い悩んでいたような気がします。理学部では入学時に学科・専攻を決める必要がなく、学部としての必修科目もあまりないので、科学の幅広い分野のなかから自分の興味のある授業を選ぶことができました。

ですが、じつは4年間ほぼ部活中心の生活で、大学時代にもっとも打ち込んだのはラクロスでした。女子ラクロス部に入部し、「一部昇格」という目標に対して、自分はなにができるのか、チームでどのような役割を担うべきなのか、自分に問い、行動する毎日でした。週5で朝5時に起きて電車に乗り、7時から農学部グラウンドで練習、という部活中心の生活。午前中の授業があるときには練習を抜けて大学の授業へ……という、京大生らしからぬ(?)、午前中をフル活用した朝型生活を送っていました。そのころに身につけた「行動にうつす」という姿勢は、社会人になってからも、主体的に課題を特定し、それを解決するための行動をとる、といったことに繋がっているなと思います。京大は「自学自習」という教育理念も掲げていて、自分がやりたいと思うこと(それがたとえ勉学でなくても)に全力で取り組むことを推奨してくれているような文化がありました。そういった主体性を養えたのは、京大に入ったおかげなのかな、と思っています。

自分がやりたいと思うことをいつか形にするために

学部を卒業後、研究の道に進むかとても迷いましたが、研究ではなくビジネスを通じて、社会によりインパクトを残せるようなことに取り組みたいと思い、就職を決めました。経済がどのように動くかということを実用的に学び・理解したいということと、いまはまだ形になっていないものの、自分がやりたいと思うことをいつか形にするために必要なビジネスパーソンとしての基礎的な力をつけたいという思いもありました。

入社したアクセンチュアというコンサルティング会社では、クライアント企業の成長を支援していて、私はいま、CX(顧客体験)経営に関するプロジェクトに携わっています。クライアントが顧客によりよい商品やサービスを提供するには、どのように顧客と接点をもって、心地よい体験を提供するか、ということを、日々クライアントや同僚とともに議論し、体験づくりに取り組んでいます。私は日々、いまと近い将来だけを見据え、いまの自分にできることを精一杯するように心がけています。昔からあまり夢や将来像を

思い描いたことがないのは、不確実性が高く、変化も激しい現代において、「こういう人間になる！」となりたい将来像を決めても、環境などの外的要因によって、自分では手立てのない状況になったり、実現が困難になってしまうことが往々にしてあるのではないかと思っているからです。そんな見通しが立たない時代ではあるけれども、こういった変化に適応できるような、柔軟な人間でありたいと思っています。

京都大学ラクロス部。
左から3人めが片岡さん

上司・同僚からの一言

金井 真梨絵さん
金融サービス本部　シニア・マネジャー

入社してまだ３年めですが、クライアントからの信頼も厚く、チームを引っ張る中心メンバーとして活躍しています。自身の担当領域に限らず、他メンバーの状況も見ながら適宜サポートしたり、現在取り組んでいる新時代の顧客体験づくりに関してもさまざまな観点から掘り下げて検討したり、チーム全体のパフォーマンス向上に貢献してくれています。ひきつづきクライアント業界に対する深い知見を活かしながら、コンサルタントとしての専門性を磨いていき、今後のアクセンチュアを担っていくような人財になってもらいたいなと期待しています。今後もいっしょに働けるのがとても楽しみです。

column 1

こんなふうに勉強していました

京大といえば、求められる偏差値が高く、難関大学というイメージがありますが、当時は、「理学部の定員の最下位に入れば入学は入学だ！」と思って開き直っていました。その定員最下位に入るために、必要な点数は何点で、それをセンター試験・二次試験で何点ずつとる必要があって、そのためには、現状の学力をふまえるとどのような勉強をしなければならないのか、ということと向き合いながら勉強をしていました。

column 2

休日は仕事から離れて趣味に没頭

YouTubeのゲーム実況で気になったゲームをプレイしたり、友人とオンラインゲームをしたり(ゲーミングPC持っています！)。また、仕事を通じてたくさんの人とコミュニケーションをとるなかで、「ヒトとはなにか」ということに興味が移ってきたので、人類学に関する本を読み漁ったり。たまに車で30分ほどのところにある温泉に行き、交代浴などをして大量に汗をかいてリフレッシュすることもあります。

interview 02

美容がもつ魔法の力で多くの人を美しく、笑顔に

持田真歩

株式会社ミルボン

高校生のみなさんへ

模試の成績が悪かったり、周りとくらべて落ち込んでしまうときもありますよね。でも、自分のいちばんの味方は自分自身。努力はかならず報われます。がんばっている自分を信じてあげてください。私はセンター試験の成績が芳しくなく、合格判定はもっとも悪いものでした。それでも「絶対合格できる！」とみずからを鼓舞し、なんとか合格することができました。京大での生活はとても楽しいです。夢のキャンパスライフを思い描きながら、受験を乗りきってください。応援しています！

もちだ・まほ
農学部応用生命科学科 卒業、農学研究科修士課程 修了
大阪府 大阪教育大学附属高等学校平野校舎 出身

やると決めたら一直線。勉強漬けで京大合格！

高校生活のほとんどを占めていたのは勉強と音楽。勉強は努力したぶん、きちんと結果に反映されるので好きでした。授業のなかでは、目で見て変化がわかるのが楽しい化学の実験がいちばん好きでした。部活動は、軽音楽部でドラムを担当。文化祭で演奏したり、ライブハウスで他校の高校生といっしょにライブをしたこともあります。

京大受験を意識したのは、高校2年生のときに参加したELCAS（京大が実施する高校生向けの体験型学習講座）がきっかけでした。当初は大学で実験ができるなんて楽しそう！ と軽い気持ちで応募しましたが、さまざまな化学現象を解明する楽しさにどんどん魅了されていきました。教授やチューターの方はとても親切で、素朴な質問に対しても真摯に答えてもらえたのが印象に残っています。実際に大学のキャンパスに足を運んでいたので京大への憧れがどんどん強くなっていき、受験を決意しました。

大学の学祭でのライブ

化学が好きだったので理系の学部に行くことは決めていましたが、願書を出す直前までどの学部にするか悩んでいました。絶対京大に合格したかったので、自分の得意・苦手科目を考慮し、合格の可能性がもっとも高かった農学部を選びました。受験を決めたものの成績は合格にはほど遠く、より熱心に勉強するために苦手な数学は個別指導塾に通い、2つの塾をかけもちしました。やると決めたらとことんやる性格なので、勉強漬けの毎日でした。なかなか成績が伸びず思い悩んだ時期もありましたが、けっして京大受験を諦めることはなかったです。

学びたいことを自由に学べる環境のもと、ひたすら自分の興味を追求

大学に通いはじめて人の多さにまず驚きました。大学生活を通じてたくさんの人と出会いましたが、十人十色という言葉がぴったり。みんな自分の軸をしっかりもっていて、さまざまな価値観にふれることができました。また、たくさんの学問にふれることができたのもよかったです。

1回生のときに受講したゼミを通じて有機化学の概念が変わり、もっと学びたいと思いはじめたものの、当時所属していた学科には有機化学の専攻はなく、転学科への挑戦を

column 1

こんなふうに勉強していました

記述対策を重点的に行ないました。具体的には、解いた過去問を学校や塾の先生に添削していただきました。自己採点だと判断が甘くなりがちなので、客観的に採点してもらうのがおすすめです。とくに苦手だった数学は演習と添削をくり返し、考え方のポイントなどをまとめたノートをつくりました。模試や受験本番前に見返して復習するだけでなく、これだけがんばったから大丈夫！ とお守り代わりにもなったアイテムです。ほかには、英単語学習です。脳は寝ているあいだに記憶を整理すると知ったので、寝る前の10分間を暗記タイムにしていました。

column 2

いまもドラムをつづけています

毎週土曜は音楽教室に通い、ドラムを習っています。最近電子ドラムを購入し、自宅でも演奏できるようになって嬉しいです。コロナが落ち着いたら、バンドを組んでライブ演奏もしたいですね。

決意。この選択を周りはとても応援してくれました。自分の学びたいことを追求するには、京大は最高の場所だといまも思っています。

1、2回生のころは塾講師やイタリアンレストラン、派遣会社の事務などさまざまなバイトを経験しました。化粧品や服を集めるのが趣味だったので、バイト代はほとんどそれらに費やしていました。バイトがない日は友人と食事に行ったり、カラオケに行ったり。京都はお洒落な飲食店が多く、お店を巡るのも楽しかったです。3回生からは専門的な授業が増え、学業中心の生活になっていきました。4回生になると研究室に配属され、自分が主体となって研究を進めていくおもしろさと難しさにふれることができました。建屋には広めの給湯室があったので、研究室の仲間と夕食を作り、わいわい話しながら食べたのはよい思い出です。

大好きな美容の世界で わくわく、アクティブに

小学生のころから化粧品に興味があり、将来は化粧品や美容業界で研究者として働きたいと考えていました。化粧品に興味をもったきっかけは、習っていたバレエの発表会。本番前はとても緊張していたのに、メイクを施すと別人になったみたいに自信が湧いてくる……まるで魔法のようでした。私は癖毛が悩みだったのですが、中学生のときにはじめて縮毛矯正をしました。きれいなストレートヘアになり、鏡を見るのが楽しくなりました。こういった経験から、化粧品や美容がもつ力で多くの人を美しく、笑顔にしたい、と考えるようになりました。それからは暇があればSNSや雑誌で化粧品の情報収集をし、日本化粧品検定1級や化粧品成分検定1級の資格を取得しました。

私が就職活動の軸にしていたのは「その会社で働く姿を想像してわくわくするか」。美容室で扱うシャンプー類、カラー剤などを開発・製造・販売するミルボンでは、毛髪や頭皮における基礎研究もさかんですが、毛髪科学は肌にくらべるとまだまだ発展途上。自分の発見が世界初のものになるかもしれないと心が躍り、入社を決めました。研究職で入社し、研修をへて現在は「オージュア」というブランドでおもにシャンプーとトリートメントの開発を担当しています。研究職と聞くと、研究所に籠りっぱなしのイメージですが、ミルボンの研究職はとてもアクティブ。美容室を訪問し、美容師の方と意見を交換しながら製品開発を進めていきます。また製品をご愛用いただいているお客さまにもヒアリングし、開発に活かしています。将来的には、なにを極めていくのかはまだ考え中ですが、「○○といえば持田さん」と周りから言ってもらえるような人材になりたいです。

上司・同僚からの一言

谷川 祥子さん
開発本部 研究開発部
プレミアムブランドAJチーム マネージャー

持田さんは配属当初から目標を明確にもっており、自身で実験の計画を考え実行できるところがすばらしく、安心して仕事を任せられます。オージュアブランドは、取り扱っていただいている美容師さまだけでなく、お客さまからの期待もとても高いブランドです。持田さんならきっと、持ち前の明るさとお客さまの髪をきれいにしたいという想いの強さで多くの女性を美しく、笑顔にできるようなヘアケアをつくってくれると期待しています。

interview 03

ものの見方が広がっていくおもしろさを追い求めること。私の関心は人文・社会科学の思考から

橘 菫

株式会社ハウテレビジョン

たちばな・すみれ
教育学部教育科学科 卒業、大学院教育学研究科修士課程 修了
三重県 県立伊勢高等学校 出身

高校生のみなさんへ

自分の心に正直に、好きだという気持ちや学びたいと思う気持ちをたいせつに、道を選んでください。好きなことのためならがんばれますし、たとえうまくいかなくても、よき経験になると思います。

少しでも京大に興味がある方へ。多感な学生時代を京都大学という空間ですごせたことは、私にとって大きな財産でした。多方面に尖った優れた先生方、学問を尊重する大学、学生が主役の左京区界隈の浮世離れした空気感、京都という街にあふれる歴史、文化、自然……。これらに魅力を感じるなら、ぜひ挑戦してみてください。

「京大に行きたいけれど、自分には難しい」と思っている方。どうかあきらめず、リサーチし、勉強し、仲間やサポートを得る機会を探し出してほしいと思います。自分の思いをたいせつに、正しく努力を重ねれば、道は開けると信じています。

〈たまたま〉環境に恵まれ、京大へ

地元の公立高校に入学した当初の私は、「大学進学率」という言葉も知らないほど、勉強にも進学にも関心が薄かったように思います。しかし、学ぶことのおもしろさを教えてくれる先生方とたまたま出会い、一気に「勉強が楽しい」と思えるようになりました。部活動も好きでしたが、「一日でいちばん楽しいのは授業の時間」というくらい、わくわくして授業を受け、放課後も先生を質問攻めにしていたことを覚えています。

なかでも、お気に入りは現代文の授業。人文・社会科学の思想をとおして、思考の幅を一気に広げられるように感じました。担当の先生がたまたま京大の教育学部出身で、「こうした考え方ができる人になりたい」と思ったのが、京大に興味をもったきっかけです。しかし、入試難易度が高くてなかなか決断できず、心を決めたのはセンター試験を終えてから。先生がたや友だちに助けてもらいながら慌てて二次試験の勉強をし、周囲に助けられて進学できた私は、幸運だったと思っています。

自分を形づくる基盤が形成された大学生活は〈青春そのもの〉

18歳まですごした大好きな故郷・伊勢市は、のどかで素敵な街でしたが、遊びも勉強も都市部ほど選択肢が多くありませんでした。ゆえに良くも悪くも「選択で迷う」経験が少なかったように思います。それが、京大に来てはじめて、さまざまな方面で「なにかを選ぶ＝なにかを捨てる」必要性に直面し、「自由を謳歌する」難しさを痛感したのです。たとえば、当時500科目くらいあった一般教養。入学当初、時間割をつくるにあたって「なにをどう選んだらいいんだろう」と悩みました。しかし慣れてくると、すべてを自分で選択できることがとても心地よく、社会人になったいまも、こうした自由を追い求めて飛び歩いているように思います。

また、入学前は「変人が多い」という噂を聞いていましたが、入ってみると「普通である」、「変である」ということに頓着することが少ない、「みんな違ってみんないい」のが当たり前とされる世界でした。京大で数年すごすとだれもが、〈そのままの自分〉になっていく。日本全体もこういう社会になるといいなと思います。

学部時代の生活をふり返ると、早朝から深夜まで、部活動（フィギュアスケート部）の練習をしたり、春は桜、夏は蛍、秋は紅葉と花鳥風月を追って京都中を巡ったり、友達とあらゆることを議題に議論したり……。たくさん心をゆさぶる刺激を受け、笑ったり泣いたり、忙しい日々でした。

いっぽう大学院では、高校時代からの関心を追求し、教育・歴史社会学を専攻。それなりに本を読み勉強したつもりでしたが、周りの学徒たちにまったく追いつかず、いつも背伸びしていました。でも、そういった「自分には到底かなわない」という人たちに、つねにものの見方をひっくり返されるような経験は刺激的で、日々楽しく議論をしていました。また、イギリスのオックスフォード大学に3週間短期留学し、多様な専攻の研究者の卵たちと切磋琢磨したのは夢のような経験でした。ありがたいことに「今年が人生でいちばん楽しくて充実している」と毎年感じていて、ふり返ると青春そのものの大学生活でした。

ゼミの仲間と稲垣恭子先生、竹内里欧先生と

京都大学での学びと文化を礎石に、〈好きなこと〉を仕事にする

新聞社、外資系コンサルティング会社をへて、いまは学生や若手社会人のキャリアを支援する「外資就活ドットコム」、「Liiga」というメディアを運営する会社で、コンテンツ戦略の立案や、記事の執筆・編集、組織づくりなどをしています。知人の紹介で転職したいまの会社は、自分のキャリア選択の軸にぴったり合っていることに加え、各界の一流

の人たちに取材できる環境、「視野を広げる楽しさ」を学生に伝えられる事業などに魅力を感じています。

私のキャリア選択の軸は2つ。ひとつは「人間の心や営み・社会を深く理解できる仕事をする(＝広い意味で〈教育〉に関わる)こと」で、京大教育学部での学びが基盤となっています。もうひとつは、新聞社での経験に根ざし「メディアの組織づくりに関わること」です。京都大学という文化を礎石としてビジネスに関われることは、自分の強みだと思っています。当時の指導教官からは「ほんとうに好きなことを研究するように。好きなことをして失敗しても自分の選択だから受け入れられる」と言われていましたが、京大にはそういう空気感がありました。社会人になりたてのころは無我夢中でしたが、そろそろ慣れてきたことから、京大生のころのように「自信をもって好きなことをする」という意識を取り戻しつつあります。

将来像としては、ひきつづき本業で2つの軸に関わっていきたいです。また、キャリア相談を受けたり、家庭教師を依頼されたりすることが多いので、個人としてはそうした活動をつづけていきたいという思いもあります。将来的には大学などのアカデミアの世界にも、なんらか貢献したいですね。

記者時代に担当した特集記事

上司・同僚からの一言

池内 淳志さん
執行役員 COO

橘さんは入社から1年程度ではありますが、すでに部門の中核的な役割を担っており、いつもほんとうに助けられています。向上心が高く、編集者としてのレベルを高めるべく日々努力しているのに加え、部門の課題に対しても真摯に向き合っており、部門の成長に大きく貢献しています。
橘さんとは、いつも本質的な議論ができるため、とても頼りにしています。会社が大きく成長をしていくにあたって、さらに大きな役割を担ってほしいと思っており、さらなる成長に期待をしています。

column 1

こんなふうに勉強していました

高校の先生に「東大でも京大でも、入学試験に学校のカリキュラムを逸脱したものは出ない。学校の勉強をきちんとしたら受かる」と言われたことを信じて、ひたすら学校の定期テストで100点を取ることに専念していました。ただ、京大の入試問題は本質をついたおもしろい問題だと感じていたので、3年生の夏ごろからは、京大の過去問に近い問題を解いたり、京大模試を受けたりしていました。結果論ですが、前者はセンター試験、後者は二次試験と手堅く対策できたと思います。

column 2

意外と規則正しい生活を送っています

大学院時代の私は日が落ちるころに起きて、19時に研究室に行く夜型生活。幸い指導教官や、ドクターの先輩も同じ時間帯に活動する人たちだったため、煮詰まってきた深夜2時ごろに先生を訪ねて助言を求めたり、先輩に相談しているうちに夜が明け、力尽きてソファで寝てしまったり……。先生には「一生あなたは日の光の下で働けないわよ」なんて言われましたが、いまはなんとか太陽のもとで働いています。

卒業生インタビュー
interview
04

宇宙×医療。いまはまだ漠然とした夢を叶えるために

円尾芽衣

エムスリー株式会社

高校生のみなさんへ

京都大学には、門さえたたけばあらゆる扉を開いてくれる環境があります。少しでも興味があれば、諦めずにチャレンジしてみてください。

浪人生のみなさんは、後がないというプレッシャーに負けないでください。勉強の不安は勉強をすることでしか解決されません。私は浪人時代の友だちと、いまだに仲良しです。いっしょに乗り越えられるよう、刺激しあってください。応援しています。

まるお・めい
理学部理学科・宇宙物理系 卒業、大学院理学研究科修士課程 修了
兵庫県 神戸女学院高等学部 出身

「緩やかな専門化」アドミッションポリシーに感動

生徒会、体育祭に打ち込み、ダンスと書道に夢中だった中高生活。高校2年の夏から1年間、アメリカのウィスコンシン州に留学もしました。当時はいろいろなことに興味をもっていたため、進学先を決めるのにとても苦労し、日本の大学だけでなくアメリカの大学へも目を向けていました。

そんなころ、京大理学部のアドミッションポリシーに記された、「緩やかな専門化」というフレーズに心を動かされ、高校3年生の秋に、京大受験を決めました。中高の先生や親の友人が京大理学部出身だったこともあり、尊敬できる人に出会える期待が高まったことも決め手でした。高3の夏までアメリカにいたので、物理を一から学びはじめたのは秋。とても追いつけるような遅れではなく、現役のときは「男前受験」で京大のみを受験し、結局は京大お膝元の京都の駿台予備校に入学。浪人中には成績が伸び悩んだこともありましたが、予備校からの帰り道はリフレッシュの時間と決めていました。駅までゆっくり川沿いを歩いたり、離れて暮らす親となにげない連絡を取って心を落ち着かせたり、ときには夜空の星や月を見上げたりしたことは、大きな支えとなりました。

京都大学岡山天文台のせいめい望遠鏡

チャンスあふれるジャングルのような環境で学ぶ

京大入学後は、思っていた以上に周りのレベルが高くて凹みましたが、代数学や植物地理学など、いろんな分野のエキスパートが同級生にいたのはとても刺激的でした。入学当初、つながりができるまでは一人ぼっちだと孤独を感じることもありましたが、そのうち、「それだけ機会にあふれている」と捉えられるようになりました。チャンスはそこらじゅうに転がっていて、興味をそそられることもたくさん。先輩曰く、「京大はジャングル」(ちょっと入ってみたらとてつもなくおもしろいものがあるけれども、前をすっと通り過ぎるだけだとカオスにしか見えない……)だそうです。

もう一つ、それまでには感じなかった劣等感というものを大学ではじめて感じました。周りがとても賢く見えて、懸命に食らいついていった記憶があります。1回生のころから参加していた「自主ゼミ」ではハイレベルでわからないことが多く、準備中に憂鬱になることも多々ありました。ところが、いつもいやだなと思いながらも参加しつづけるうちに、「いやだな」が少しずつ消えて、「やればできるかもしれない」と思うことが多くなっていました。つづけて取り組み、わかることが出てくればおもしろくなってくるという経験でした。

専攻を決めるにあたっては、理系の学問全体に興味があったので、1回生では数学・物理・化学・地学・生物のすべての分野を履修し

column 1

こんなふうに勉強していました

センター試験に向けての対策は、年が明けてから2次試験対策の傍ら、センターの過去問を解き、間違えた問題とその背景知識をノートにまとめました。メンタルが結構影響してくるので、自分自身に「大丈夫や、できるで」と言い聞かせ(笑)、セルフ・コントロールしていました。個別試験対策では、数学があまりできていなかったので、浪人中に基礎から徹底的にやり直しました。

column 2

東京でのすごし方

朝は、スピーカーからテンションの上がる音楽をかけ、身を委ねています。せっかく東京に来たからには東京について詳しくなろうと思い、『街がわかる東京散歩地図(散歩の達人MOOK)』を読んで散歩したり、ハイキングしたり自然ともつきあっています。

ました。2回生の終わりには、どの系に進むのか決めなければならず、ギリギリまで迷いましたが、やっぱりいちばんかっこいいと思った宇宙物理学を選択。卒業後もまだまだ学びたかったので大学院に進学し、宇宙物理学のなかでも装置開発の研究室に所属しました。院生時代には、東アジア最大の望遠鏡のある岡山まで天体観測によく行きました。

京大理学部には、すごくハイレベルなものが転がって存在しているだけでなく、いろいろなところに驚きやワクワク感があったと思います。受け身ではなにも起こらないけれど、自発的に動けば、がんの研究者のラボで研究させてもらったり、きのこの専門家と調査をしたり、他大学の研究者と沖縄のサンゴ礁の生態調査に出かけたり、同年代と徹夜で物理実験もしました。海外の研究留学も実現しました。ほんとうにいろいろな機会に恵まれました。

宇宙物理学と医療をつなぐ——未来の可能性は無限大

大学院修了後は、ITを活用して医療の世界を変革するエムスリー株式会社に就職し、マーケティングとデータ分析の部署を兼務しています。現在は、コロナワクチン情報を集約するコンテンツの新設プロジェクトの旗振り役を任されています。入社早々にここまでの経験ができるとは思っておらず、毎日忙しいですが、自分のスキルが増えることが実感でき、仕事がほんとうに楽しいです。

いろんな仕事に携わるなかで、どれも一から学ぶことばかりなのですが、質問すれば先輩たちがていねいに教えてくださり、つねにこちらが求める以上のフィードバックをもらえます。メンターやリーダーとの定期的なミーティングなど、サポートの手厚さもありがたいです。

じつは入社前の面談ではわがままを伝えていました。アメリカでの勤務希望と上記の2部署で働く〈二刀流〉です。他社でも同じことを伝えると、「入社して5年経ったらアメリカで半年くらい勤務できる」と言われたのですが、私としてはもっと早く行きたいし長くいたい。エムスリーはそんな私の希望を真剣に受けとめ、それならアメリカ勤務を前提にしたキャリアパスをいっしょに考えようと提案してくれました。

いまはニューヨークオフィスで働くための準備として、アメリカのオフィスに日本のコンテンツの作成手法の情報提供をする仕事も兼務しています。もともと学生時代は宇宙物理学を学んでいたので、将来、宇宙と医療とがオーバーラップするような仕事、たとえば宇宙旅行がさかんになれば、そこにはヘルスケアも当然必要になってくる。そんな仕事ができたら楽しいだろうなと思っています。

3回生で経験した微重力実験

上司・同僚からの一言

玉嶋 謙一さん
サイトプロモーション グループリーダー

円尾さんはグローバル人材として、新卒1年目から海外のプロジェクトにも参画するなど、将来が期待されているスタッフの1人です。現在はデータサイエンティストとしての専門スキルを生かしつつ、マーケティング部門のプロジェクトマネージャーとして活躍しています。いつも飄々としているクールビューティで、入社早々リモートワーク中心という難しい環境にも関わらず、安定感のあるコミュニケーションとアウトプットを見せてくれています。ものすごいスピードで成長してくれており、上司としてとても頼もしく感じています。

卒業生インタビュー
interview
05

人の役にたちたい、喜ぶ顔が見たい。それが学生生活をとおして気づいた私の価値観

村上 宥

東京建物株式会社

むらかみ・ゆう
工学部建築学科 卒業、大学院工学研究科修士課程 修了
大阪府 四天王寺中学・高等学校 出身

高校生のみなさんへ

目標とする大学への入学に向けて後悔しないように勉強に励むことも大切ですが、高校生活は二度とないたいせつで貴重な期間なので、友だちとの時間を楽しくすごしてほしいと思います。京都大学はいつでもたくさんのことを自由に学べます。いまいちばん関心があることを率直に、大学で学ぶこととして選んでください。ぜひ、がんばってください。

自分のインスピレーションを信じて受験

中学生のころはあまり成績がパッとせず、順位は下から数えたほうが早いくらいでした。そんな私も、友だちの影響で通いはじめた学習塾のおかげで勉強する習慣がつき、徐々に成績も伸びてきたことでさらに勉強が楽しいと感じるようになりました。友だちと学校帰りにいっしょに塾へ行って勉強したり、ときには息抜きに遊んだり、スポーツが好きだったので体育委員になって体育祭の運営に関わったり、学校生活をぞんぶんに楽しんでいました。

習いごとや中学受験など、なにかにチャレンジするときにはかならず自分で選び、そのための努力は厭わない性格です。そんな私が大学受験を見据えたとき、学生の主体性を第一にしながらさまざまなことが学べる環境が整っている京都大学は、とても魅力的に感じられました。

ラクロス部で全国学生選手権決勝に出場

理数系の科目が得意だったこともあり、工学部に関心をもちました。私が受験した当時は学科まで決める必要があったため、海外（とくにヨーロッパ）の街並みを見るのが好きだったことと、長く世に残るものとして建築を学んでみたいと思ったことから、最初にインスピレーションを感じた建築学科を選びました。志望校と学部まで具体的に決めたことで、試験の形式や出題傾向を意識した勉強方法を工夫するようになりました。

さらに、学習塾では同じように京大をめざす人がいるクラスに入り、「京大に入るためにはまずはこのなかでいちばんになろう！」という意識で、日々の勉強に取り組み、切磋琢磨できたと思います。

選択の自由。京大で学んだすべてのことが倫理的な考え方につながっている

晴れて入学した京大工学部。女性が少ないと聞いていましたが、建築学科は約4分の1が女性だったので、想像よりはたくさんいたという印象でした。中高が女子校だったため、環境はずいぶん変わりましたが、もともと小さいころから男の子に混じって野球やサッカーをして遊んでいたので、抵抗感はありませんでした。

学部の4年間は、体育会男子ラクロス部にマネージャーとして所属。日本一を目標に朝イチから部活、授業に出てまた部活というサイクルで年中部活に取り組んでいました。

夏季休暇に行ったスイス旅行

就職すればいくらでも仕事はできると思い、アルバイトはほとんどせず、この4年間にしかできないこと、学業と部活の2本立てをとにかくやり遂げようと決めました。部活を通して学部を超えたさまざまな人たちと出会えたことは私にとって貴重な財産です。一人でなにかするより、「人の役にたちたい」、「喜ぶ顔が見たい」ということが私の価値観なのだと気づくきっかけにもなりました。

学業では、建築学科で構造分野の研究に出会い、解析や理論を通して地震の揺れや被害を抑えるための手法を提案する構造力学の研究室を選択しました。海外の学会にも参加するという貴重な体験もし、地震の多い日本ならではなのか、この分野においては日本の研究がとても進んでいると感じることができました。

京大のよいところは、まずは人。京大には地方出身の人が想像していたよりも多く、いろいろなキャラクターの人、私の想像を超えるさまざまな価値観や創造力、エネルギーをもった人たちと出会えました。さらに学問。高校生のときには各教科の問題を解くことが

勉強だと思っていましたが、大学では強制ではなく選択の自由があり、さまざまな分野を専門とした研究に出会うことができました。

「自分はどうしたいのか」、「どうするとうまくいくのか」をつねに思考し、責任を意識する

部活のマネージャーをしていたこともあって、就職活動では、人の役にたつこと・貢献できるようなことをしていきたいと考えていました。その思いを生きていくうえで生活と切り離せない建物をとおして実現し、その企画・開発に携わりたいと考えるようになりました。これを実現できるのはどういう業界・会社かを広い範囲で検討し、研究と並行して、できるかぎりの時間を割いて説明会や社員の話を聞く機会をつくり、〈自分で見る・聞く〉をとおして納得できる業界・会社を絞りました。そのさいにもいちばん重視したのは、インスピレーションでした。後悔しないためには自分自身で判断することが重要だと考えていたからです。

そのなかで、学生と真摯に向き合っている採用担当者や社員と出会いました。昔からチームスポーツに取り組んでいた私は、なにができるかということと同じくらい、いっしょにがんばる周囲の環境がたいせつだと考えていました。これだけ〈人〉に向き合ってくれる社員といっしょに、私もがんばりたいと思ったのが入社の決め手となりました。

私が所属する「東京建物株式会社」は、総合デベロッパーとよばれる不動産会社で、賃貸オフィスや分譲マンション、商業施設などさまざまな用途の建物を開発する会社です。現在私は東京駅前の再開発事業に携わっており、数年後の竣工に向けて、地元の権利者の方がたや設計者・施工者の方がたと日々打ち合わせをしています。このプロジェクトに携わるようになって2年。私は一担当者でしかありませんが、いずれは自分が中心となり、このような大きなプロジェクトを進めていく力をつけたいと思っています。

上司・同僚からの一言

大塚 裕司さん
都市開発事業部 事業推進グループ・グループリーダー

村上さんは、再開発事業の推進業務を担当しています。メンバーの中では若手ながら、先輩社員のサポートではなく、プロジェクトの中心メンバーとして活躍する姿を頼もしく見ています。また、プロジェクトを進めるなか、業務の取りこぼしが発生することもありますが、そういったときに、村上さんがフォローする場面をなんども見てきました。多忙ななか、なにごとにも自分ごととして業務に取り組む姿勢は、周りに刺激を与えています。性格も明るく、親しみやすいため、ときには上司や先輩社員をからかいながら、その場の雰囲気を和やかにしてくれます。今後も、たいへんな業務がつづくと思いますが、都市開発の中心メンバーとして活躍しつづけることを期待しています。

column 1

こんなふうに勉強していました

センター試験対策は、高校3年生になってからの社会だけ。それ以外の教科は基本2次試験を意識した勉強をしました。高校の授業と学習塾の勉強を中心に基礎を固め、高校3年生になってからは各教科の過去問を25年分用意し、実際の試験時間を意識しながら、解けるようになるまでくり返し取り組みました。勉強をはじめる前に、その日になにをするかを手帳に書いて、終わったら線を引いて消すことが、小さなモチベーションでした。

column 2

だいじにしている時間

年に数回しか帰省できませんが、実家の家族は私の人生のたいせつな支えであり、安らげる貴重な時間です。
普段の朝、家を出るまでの数分の軽いトレーニングも、体調が整い1日の元気が出るのでお気に入りの時間です。

学生の街

京都 散策マップ

京都大学に入学すると、まず足をふみいれるのが吉田キャンパス。
8つの構内に分かれたキャンパスで、10学部の学生たちが毎日をすごしています。
落ち着いた環境ながら、京都市内の繁華街も自転車圏内。
少し歩けば鴨川や哲学の道、さらに足をのばせば
京都御苑や下鴨神社、平安神宮などの京都の名所が出迎えます。
学生たちが足しげく通うお店も多数。京都大学で学生生活を送ってみませんか

カフェ・レストラン

❶出町スタンド
豚焼や鍋などの韓国料理が楽しめる。ネオンが光る、写真映えのする店内が魅力。

❷KAFE工船
自家焙煎とネルドリップコーヒー専門店。

❸みつばち
名物は手づくりのあんみつ。夏には夏季限定のかき氷をめあてに各地からお客さんが集まる。

❹点 喫茶室
ゆっくりと落ち着いた時間をすごせる喫茶店。

❺おむらはうす
オムライスの専門店。湯葉をつかったものなど、変わり種のオムライスもそろう。

❻凛屋
看板商品は自家製生パスタとチーズケーキ。友人とのランチに最適。

❼進々堂 京大北門前
河上肇のエッセイや、森見登美彦氏の小説にも登場。京大生や教員の憩いの場。

❽パティスリー・タツヒト・サトイ
ケーキやパン、かき氷などこだわりの商品がならぶ。

❾ベーカリー白川
創業90年を超えるベーカリーショップ。食パンが人気。

❿麺屋神楽
「よく行くラーメン屋さんです。濃厚煮干しというメニューがお気に入りです」上田菜央さん

⓫茂庵
吉田山の山頂にあるカフェ。緑を眺めながら食事やスイーツを楽しめる。

⓬チェルキオ
京都大学の正門の斜め前に。豆腐を使ったパンがならぶ。

⓭吉田山荘 カフェ真古館
吉田山の中腹にひっそりと。東伏見宮家の別邸であった建物を料理旅館やカフェとして活用。

⓮swimpond coffee
モーニングも楽しめるカフェ。コーヒー豆の販売も。

⓯カフェアルマ
ゆったりとした時間が流れるカフェ。

⓰Bar探偵
純喫茶をリニューアルしたレトロな内装が魅力。

⓱喫茶フィガロ
内装は昭和時代の喫茶店の装いを引き継ぐ。サイフォンで淹れるコーヒーや手づくりのケーキが味わえる。

⓲OPEN DOOR COFFEE
厳選したコーヒーのみを取り扱う、コーヒーのセレクトショップ。

おみやげ

❶出町ふたば
行列が絶えない和菓子処。看板商品は「名代豆餅」。

❷緑寿庵清水
日本で唯一の金平糖専門店。14日から20日をかけて、熟練の職人が手づくりで製造。13種類の定番の味のほか、季節ごとの多様な風味がそろう。

❸百万遍かぎや
大正9年創業の和菓子処。粒あんを焼きあげた「ときわ木」など、上品なお菓子がそろう。

❹ARTISANS flower works
厳選したオンリーワンのフラワーギフトが魅力。

アート・カルチャー

❶うつわ haku
料理と器との「ヨハク」をたいせつに制作された器が並ぶ。

❷出町座
最新作から名画まで、こだわりの一本を上映する。書店とカフェも併設。

❸トランスポップギャラリー
コミックスを中心としたギャラリー。国内外のオルタナティブ・コミックを紹介。

❹ホホホ座
独自の選書が楽しい書店。古書や雑貨を扱う「ホホホ座ねどこ」も道を挟んで隣接。

鴨川デルタ

賀茂川と高野川の合流点にある三角州の通称。アニメや映画にも登場する。

樽谷夏香さん

こあの助

タイカレーのお店ですがイチオシは豚肉がトロトロの「角煮丼」。結構なボリュームなので小サイズでも大満足。

百萬遍知恩寺

毎月15日に「手づくり市」を開催。雑貨好きやグルメな人は必見！

旧演習林事務室

大学構内とは思えない居心地のよい場所です。時間のあるときは、昼休みに友人とお弁当を食べています。

上田菜央さん

糾の森

下鴨神社の参道一帯の森林。江戸時代には納涼の場としてにぎわった。

イチョウ並木

吉田山

周囲よりも約50～60m突出する丘。山頂には、第三高等学校（京都大学の前身）の寮歌「紅もゆる」の歌碑がある。

京都御苑

今出川通りを西にむかって少し歩けば、緑豊かな京都御苑が出迎えます。時代を遡るような感覚を味わえます。

栗山晏奈さん

お花見スポット

時計台の裏側（北側）には桜が並ぶ。ベンチに座り、ボーッと桜を眺めるのも一興。

哲学の道

西田幾多郎が思索を練ったことでも知られる、約2kmにわたる疏水べりの小道。

東山慈照寺（銀閣寺）

北白川に住んでいたので、土日はお散歩として、銀閣寺→哲学の道→南禅寺→南禅寺近くのBlue Bottle Coffeeに行くのが好きでした。Blue Bottle Coffeeのコーヒーはすごくおいしいのでおすすめです。

森脇瑞希さん

京大で学ぶ！

女子学生座談会

**学問はもちろん、
学生生活もぞんぶんに楽しむ院生や学部生に、
京大をめざしたきっかけや今後の目標について
語っていただきました**

森脇瑞希さん（写真中）
工学研究科修士課程 1 回生

上田菜央さん（写真左）
農学部 4 回生

栗山晏奈さん（写真右）
文学部 4 回生

――京大をめざしたきっかけは？

森脇●高2の夏にオープンキャンパスに参加して、なんとなく興味を引かれたのがきっかけです。割と自由な性格だったので、京都大学の「自由の学風」に憧れる気持ちもあったと思います。塾に通っていなかったので学校の勉強が中心でした。勉強をがんばりすぎていたので、親に「女の子だから勉強はがんばらなくていいんじゃない」と言われたことが少しショックで、絶対に第一志望に受かりたいと思って勉強をしていました。

上田●両親が京大出身で、京大の話はいつも聞いていたので自然と興味をもつようになりました。模試の成績がふるわず京大受験を諦めることも考えましたが、周囲に打ち明ける勇気がわかずそのまま京大受験へ……。それでもチャンスは少しでも多い方がよいと思い、特色入試、一般入試の両方に出願しました。その特色入試で大好きな地衣類について話した結果、運よく合格することができました。

3

栗山●いちばんのきっかけは、高校1年生の夏休みに文学部のオープンキャンパスに参加したことです。大学構内に漂う雰囲気に居心地のよさを感じ、この大学に行ってみたいと思いました。別の理由としては、「この分野が激しく好き！」という人に囲まれて勉強できること、日本史や国文が好きなことが「変」なのではなく、同じ熱量で語り合える友人に出会えるのではないかと思ったからです。

――京大生になってみてどうでしたか？

森脇●想像どおりいろいろな学生がいておもしろいですね。周りが優秀すぎて、少したいへんだなと思うこともありますが……。学科などによると思いますが、学部2回生以降は授業をあまり詰めなくていいので自由な時間が多かったです。もちろん勉強はたいへんですが、時間に余裕があるのでアルバイトと両立しやすいです。公務員をめざすなら、3回生の冬から公務員総合職の勉強をはじめても充分に勉強時間がとれるかと思います。

上田●同じ分野に興味をもつ友人との交流は、とても刺激的です。それに加えて、これまで興味のなかった分野を専門とする友人にサークルなどで出会い、視野が広がりました。入学前にはいわゆる枠にとらわれない人が多い「変わった」大学だというイメージをもっていましたが、案外「普通」の大学だなと感じました。

栗山晏奈さん

森脇瑞希さん

空いた時間には、観光地に行っておいしいご飯やスイーツを食べて、京都を満喫しています。

栗山●期待どおり、自分と好きな方向性がよく似た友人に出会えました。何時間も特定の学問について語り合うことの楽しさは、京大だからこそ得られるもののように思います。時間があれば京都の街を歴史探訪したり、大学の図書館で勉強したり、本を読んだり。京大を中心とした区域にはワクワクが絶えず存在していて、独特の魅力を感じます。

――勉強とサークルなどの両立で工夫していることは？

森脇●サークルには所属していないのですが、アルバイトをがんばっています。心がけていることは、どっちも全力でがんばること。割とテストの点が取れれば単位がもらえる授業も多いので、テストが近づくとバイトをセーブして、勉強に集中するようにしています。先輩からの過去問を共有したり、わからないところを教え合ったりなど、同じ専攻の友達と助け合うことも結構重要です。

上田●学部4回生になると、サークルの中心的な役割ではなくなり、

上田菜央さん

研究活動もはじまったので、周りには課外活動を引退する友人もいます。でも私は、サークルでさまざまな人と関わることも重要だと思っているので、勉強の息抜きにサークル活動をつづけようと心がけています。

栗山●日ごろからやるべきことをメモにすべて書き出して、やるべきことを先送りにしないように意識しています。勉強と部活、どちらもやるべきときにはそれぞれに集中して取り組むことも重要だと思います。でないとどちらも中途半端になってしまう気がします。

――今後の夢や目標を聞かせてください。

森脇●いま、ちょうど就活をはじめているのですが、どんな仕事についたとしても自分らしく生きていきたいと思っています。

上田●今後は大学院に進学し、樹木や地衣類についてさらに学んでいきたいです。将来は、現在あまりスポットライトが当てられていない地衣類をみなさんに知ってもらうきっかけとなる仕事ができれば、と考えています。

栗山●「私だからこそできること」がある社会人になりたいと思っています。それが仕事でも、趣味でも、ボランティアでもいいので、人の役にたつことで、私だからこそやり遂げられた！ というものがあると素敵だと思います。

高校生へのメッセージ

森脇瑞希（もりわき・みずき）さん

高校生のときは、成績がふるわず、京大に合格できるとは思っていませんでした。ただ、少しでも京大に興味があるのなら、自分のレベルにあっていないとほかの人に反対されたとしても、挑戦するべきだと思います。自分が納得する答えが出せるようがんばってください。

上田菜央（うえだ・なお）さん

京大は、積極的に学びたい方にとって最適な場所です。将来の夢がある人、ない人、いまの時点でやりたいことが思いつかない人も、京大に入ってさまざまな人と関わると新しい自分にきっと出会えるはずです。私のように将来の夢がある程度明確になっている人は、一般入試だけではなく特色入試への挑戦もおすすめします。みなさんが京大で素敵な大学生活を送れるよう、応援しています！

栗山晏奈（くりやま・あんな）さん

京大には、「これが好きで仕方がない」という突き抜けた仲間がたくさんいます。好きな分野がいまある人にとっても、好きな学問を大学で見つけたいという人にとっても、とても居心地のよい大学であることはまちがいありません。中学・高校の勉強におもしろさを感じることが一度でもあったなら、京大には向いていると思います。自分の興味や好奇心をたいせつに、目の前の勉強に取り組んでみてください。応援しています！

京都大学への扉はあちこちに
まずはのぞいて体験しよう！

2020年度につづき、2021年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ほとんどのイベントがオンライン開催となりました。いっぽう、対面での大学の授業が再開しはじめ、以前のにぎわいをとりもどしつつあります

高校生応援イベント

女子中高生のための関西科学塾

＊2021年度はオンライン開催となりました

関西の大学が中心となり、女子中高生を対象に理科の実験教室などを開催しています。2006年にはじまり、第16回めとなる今回は大阪府立大学を幹事校とし、京都大学、大阪大学、神戸大学、奈良女子大学、大阪市立大学、その他協賛企業などが参加しました。

http://www.kansai-kj.org/

京都大学オープンキャンパス

＊2021年度はオンライン開催となりました

京都大学の教育・研究、学生生活を知り、大学の理念や学風を肌で感じることができるイベントです。総長の講演を聴いたり、希望の学部の模擬授業に参加したり、研究室に訪問して教員の話を聞くことができます。

https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/admissions/about/open

女子高生・車座フォーラム

京都大学での学生生活や研究者の仕事を知る機会として企画しています。京都大学はどんなところなのか、大学ではどんな勉強や研究をするのか、大学卒業後の進路にはどんなものがあるのかなど、さまざまな疑問に学生や研究者が答えます。興味のある方は、ぜひセンターホームページをご覧ください。

https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/rooting/kurumaza/

当日はオンライン形式で実施しました。下は高校生グループワークと同時間帯に行なわれた「保護者交流会」。4名の京大生が、保護者からの質問にオンラインで回答しました

表彰制度

京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）

京都大学における若手の女性研究者の優れた成果を讃える制度として、学術上優れた研究成果を挙げた若手の女性研究者を顕彰し、当該若手女性研究者およびこれにつづく若手女性研究者の研究意欲を高め、本学、さらにはわが国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成等に資することを目的に創設されました。

https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/resource/grant/tachibana

京都大学久能賞

京都大学久能賞は、京都大学OGの久能和子氏（工学部昭和50年卒）、祐子氏（同52年卒）のお母さまである久能悠子氏からのご寄附により設立されました。同氏からのご寄附の趣意をふまえ、21世紀における地球規模の課題を解決し、よりよい世界をめざし、社会に貢献したいという高い志をもち、科学・技術分野において自ら定めた独創的な夢をもつ意欲のある女子学生を支援することを目的としています。

https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/Recognition/kuno-award

学生・高校生応援イベント

日経ウーマノミクス2021シンポジウム
Are You Ready? SDGsが拓く未来

学生・高校生応援イベント「Are you ready? SDGsが拓く未来」に、京都大学は協力大学として参画しました。大学・企業の研究室紹介のプレゼンテーションでは、磯田珠奈子さん（理学研究科博士後期課程3回生）が「植物の体内時計の不思議」について発表しました。SDGs座談会発表コンテストでは、川原桜さん、中島葵さん、矢島咲紀さん（いずれも総合人間学部3回生）による「そ～じんs」が、「もっと多様性をもっと個性を」というタイトルで、みずから立ちあげた学生交流サークル「saKUra」（@saKUra_kyoto_u）の活動などについて発表しました。

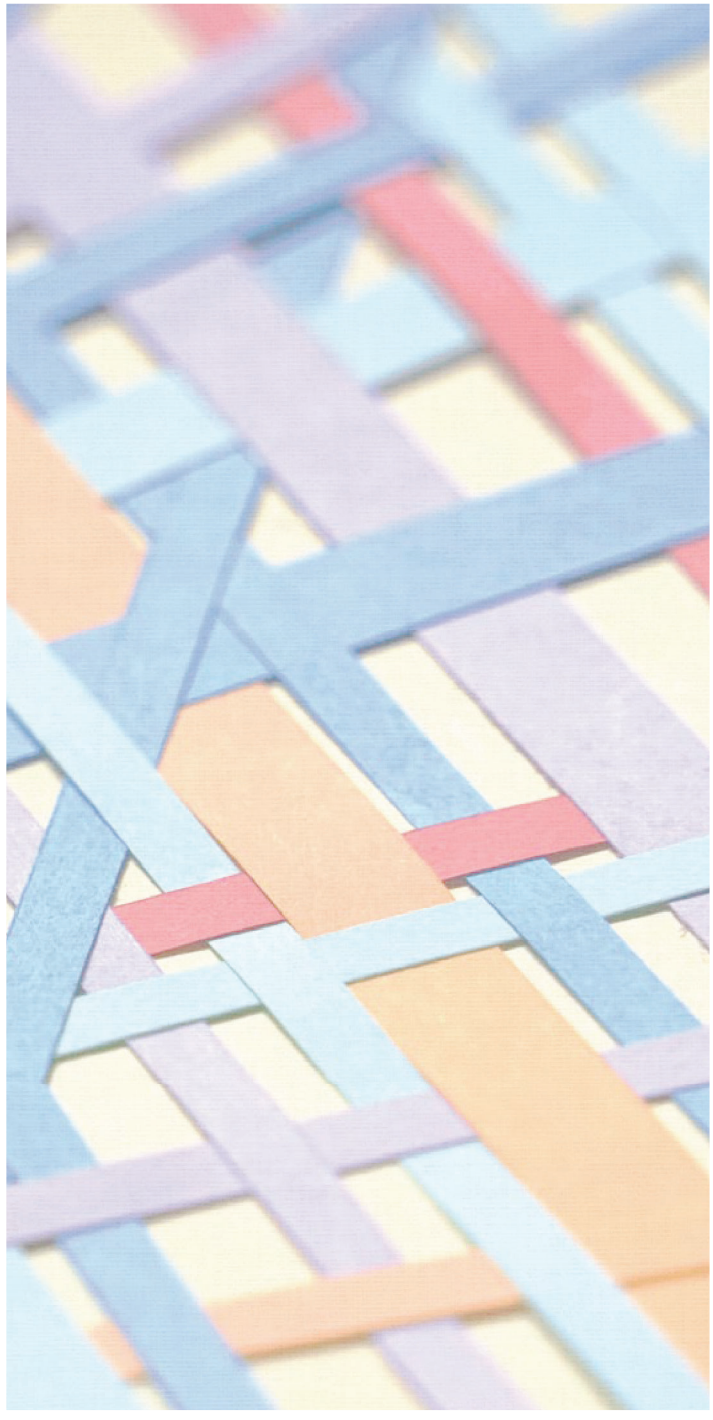
https://nwpf21.jp/

男女共同参画推進センター 機関誌

京からあすへ Vol.1

2022年3月発行

発　　行 京都大学男女共同参画推進センター
〒606-8303　京都市左京区吉田橘町
TEL 075-753-2437
E-mail　w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
URL https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

制作協力 京都通信社
デザイン 中曽根デザイン

KYOTO UNIVERSITY